

リーメイク
平成 28 年 5 月 29 日誤植訂正
平成 19 年 7 月 1 日作成

検証ホツマツタエ第 32 号掲載

フ ト マ ニ 考

ホツマツタエ研究家 吉田 六雄

ホツマ・フトマニの占い

古代日本の占いは、「太占」と「八卦」が代表格であろうか。
「ホツマツタエ」文献にはその「占い」として、「フトマニ」が記載されている。

20-22 文

マウラを召して
占問えば マウラ太占
アキニ取る

中国より渡来の「太占」「八卦」

現在日本で行われている「太占」や「八卦」は、古代中国のものが伝来したと伝えられている。その占いについて、辞書「新選国語辞典・金田一京助」より意味を調べて見た。

☆太占

上古、鹿の肩の骨を焼き、その割れ目の形で占ったこと。

☆八卦

易にあられる八種の形。占い。易者。

ホツマ・フトマニの占い手順(マニュアル)

現在の「太占」や「八卦」については占い方法が判明しており問題ないが、ホツマツタエ当時の「フトマニ」の「占い方法」については、「ホツマツタエ」文献を調べて見るが、今のところ不明な点がある。その不明な点は、一般的な占い比較論から考えて、①占い道具、②占い表、③占い手順(マニュアル)の内、②占い表は存在するが、①占い道具と③占い手順(マニュアル)が記載されてないため、不明と云わざるを得ない。

それでは何故に「占い方法」に探求するかと云うと「フトマニ図」が、完成された「占い表・フトマニ図」と思えるからである。この完成されて「フトマニ図」が存在するのに、その「占い道具」や「占いの手順(マニュアル)」が「ホツマツタエ」文献に記載がないためである。それにしても、更なる興味は現在の「太占」や「八卦」と共通する部分が存在する「占い」であるか否かであろうか。

フトマニ図

それにしても「占い道具」や「占う手順(マニアル)」は不明でも、その後の占われた「指数」より「フトマニ図」を索引し、その「占い結果」を知ることができる様である。その占い結果は「三音」の組み合わせで、「128 通り」に表されている。またその「三音」、「128 通り」の組み合わせがどの様に構成されているかを説明する。

それでは、先ず「フトマニ図」を良く観察する。するとその「フトマニ図」に円が、内側より 1~4 円あることがわかる。その円の内側より 2 番目の円「八神・・アイフヘモヲスシ」を「三音」の「最初の音」となる。次に、内 3 円「十六神・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ」と外 4 円の「十六神・・マラニリウクテセケレロノルサワ」から、放射方向の列より「3 円、4 円」の順で選び「2 音目」「3 音目」を抽出する。

この様にして「三音」の「128 通り」の「占い結果」が「フトマニ図」より作成される。この様にして作られた「フトマニの占い結果」が文献に既に記載されていることから、「フトマニ」の「占い道具」や「占う手順(マニアル)」は現在では不明であるが、古代に「フトマニ」の占いが行われていたこと立派に説明される。

128 通り・・三音(三文字・三神)

内 2 円 (八神)・・アイフヘモヲスシ

内 3 円(十六神)・・ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ

外 4 円(十六神)・・マラニリウクテセケレロノルサワ

内 2 音+内 3 音+外 4 音の組み合わせの例

ア・・・16 通り

「ア・ヤマ」「ア・ハラ」「ア・キニ」「ア・チリ」「ア・ヌウ」「ア・ムク」

「ア・エテ」「ア・ネセ」「ア・コケ」「ア・オレ」「ア・ヨロ」「ア・ソノ」

「ア・ユン」「ア・ツル」「ア・キサ」「ア・ナワ」

イ・・アと同じ様に 16 通り

フ・・ ↑

ヘ・・ ↑

モ・・ ↑

ヲ・・ ↑

ス・・ ↑

シ・・ ↑

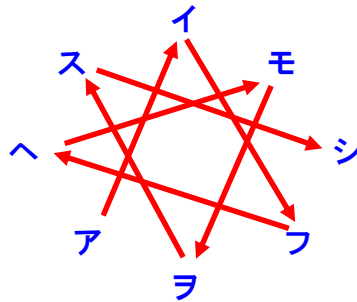
フトマニの語源を考える

「フトマニは占いのこと」と過去に勉強した知識より咄嗟に答えてしまうが、実のところ「フトマニ」のことが、良くわかってなかった。ましてその「フトマニ」の語源については、何もわかってない。

そこで2007年4月4日のある時に、「フトマニ図」を眺めながら長考していると、ある「法則」になっていることに気がついた。その法則の発見は、「フトマニ図」の文字の「記載順」と「読み順」の違いであった。

例えば「フトマニ図」の内側の2番目の円が、右回りに「ア」から「アヘスイモシフヲ」の順に右回りに記載されているのに対し、実際の「フトマニ図」の読み方は、「アイフヘモヲスシ」の順になっている。この読み方は、「ア」を起点に右回りに、「二つ中、飛びの右回り」に「読んで」行くことであった。

「フトマニ図」の内側の2番目の円



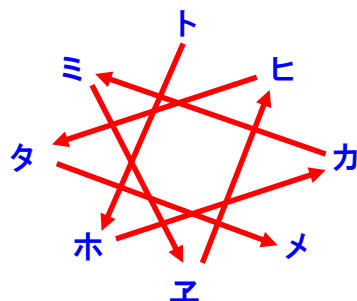
フトマニの語源 (吉田説)

読み方

「ア」を起点に右回りに、
「二つ中、飛び毎」に
「読んで」行くことであつた。⇒ ニマトフ

また「フトマニ図」の内側の1番目の円の「トヒカメエホタミ」(並び順12345678)の記載順でも、読み方は「トホカミエヒタメ」(読み順16385274)になっていた。

「フトマニ図」の内側の1番目の円



フトマニの語源 (吉田説)

読み方

「ト」を起点に左回りに、
「二つ中、飛び毎」に
「読んで」行くことであつた。⇒ ニマトフ

同じ様に「フトマニ図」の内3音「ヤハキチヌムエネコオヨソユツキナ」、外4音「マラニリウクテセケレロノンルサワ」も同様であった。

そしてこの読み方の法則の「二つ中、飛びの意味」が、「フトマニの意味では?」と気がついた。それにしてもフトマニ図を読む時と同じ様に、「フトマニ」の単語を右回りに読むと、「フトマニ」は「ニマトフ」・・・「二間を飛ぶ」と読めることに気がついた。

このことから「フトマニ」とは、「ニマトフ」の駄洒落遊びの「心」を取り入れた、古代人の「逆読み」であったことに気がついた。そして「その法則」とは、「二間を飛ぶ」ことであった。

モトアケ(フトマニ図)

これまでフトマニ図と説明してきたが、本来の呼び名は「モトアケ」が正式である。そしてこの「モトアケ」について、「モトアケ」を作成する基になった「原画」は、何であろうかと考え時期があった。そんな折りに、たまたま川越の「蔵の町」に散歩に出かけた。蔵の町には、道の両側に江戸の風情を残した「蔵造り」建築物が並び、また「時の鐘」などもある「レトルト調」の町並みであった。この「蔵の町」には、今年に入り既に2回も散歩に来ていた。そしてこの「蔵の町」で「モトアケ」の原画では?と思える物に出会った。それは真鍮で作られた「亀」であった。その亀の甲羅の模様を見た瞬間に、これが「モトアケ」だと思えた。

(注)亀の種類によっては、甲羅の模様が違うこともある。

そういえばホツマツタエ文献に、「池の亀」が24-115文に記載されていた。
24-115文

池の亀	葉お喰む万の
占形は	合うと離ると
亀占は	水湧く湧かぬ
御心お	尽くす御孫の
ホツマなるかな	

そして「池の亀」「万の 占形」や「亀占は」などのこの単語は、「フトマニの占い」への単語と相通じる言葉であると思えてきた。

モトアケと亀の甲羅模様の比較

私の家族では10年前まで、一匹の「小さな亀」を飼っていた。餌はミミズなどを裏の屋敷より、土を耕して与えていた。その時にまさか「亀の甲羅」を新たに描こうと思ひもしなかった。そこでインターネットより「亀」を検索し「モトアケ」と比較して見た。

亀の甲羅（出典）

楽天／亀の甲羅大特集を引用させて頂きました。



モトアケ（出典）

（注記）下記h pより引用しました。

<http://www.hotsuma.gr.jp/futomani.html>



モトアケと亀の甲羅の比較は、

- ①モトアケの中心部の「アウワ」の3個に対し、亀は「六角模様」が3個ある。
- ②モトアケの内1円と内2円の模様個数は各8個に対し、亀は内2橋円の「六角模様」が10個ある。
- ③モトアケの内3円と外4円の模様個数は各16個に対し、亀は外3橋円「六角模様」が24個ある。

そして共通点は、「内円の1個の模様に対した次の円の模様個数は、倍の2個」との関係である。この模様との関係は、モトアケの内2円は8個に対し内3円の個数は倍の16個である。

同じ様にして亀の甲羅を見ると「内2橋円の10個に対し、外3橋円の個数は24個」である。そして亀の外3橋円の前と後ろの4個の模様が変則のため、24個より4個を差し引くと20個である。そこで正規の模様だけで考えると「内2橋円の10個に対し、外3橋円の個数は20個」となり、モトアケと同じ様に「内2橋円の1個の六角模様」に対し、「外3橋円の個数は倍の2個の六角模様」の関係になっていた。

- ④この中心部の「アウワ」の関係、そして「1対2」の関係から、「モトアケ」の基に「亀」が原画になっていたことが容易に推定される。

日本古来の呪文

それにしても「日本古来の占い」についていろいろ調べている内に、「太占」の占いで、インターネット(注2)情報の「太占の説明」を省略することができなくなった。その理由は「太占の中のひとつに過ぎないが、亀ト・鹿トの占いの過程の中で、日本古来の呪文として、「トホカミエミタメ」という呪文を唱えていたことである。この「トホカミエミタメ」の呪文は、フトマニ文献の「モトアケ」の内1円に記載された「トヒカメエホチメ」、読み並びにて「トホカミエヒタメ」と同じであることから、この原則をホツマツタエ研究者は「無視」できないことと捉えるべきであろうか。

このことは、「検証ホツマツタエ(31号)・平成19年6月」で、「フトマニ占手順」「一ひとつの推論」が掲載されているが、その一部に疑問があるからである。その疑問は、占い結果を抽出する方法にある。それは「8本の棒より3回抽出・・・」の推論の組立て方に問題がある。

「モトアケ」より3音の「アヤマ」等の占い結果として導かれていることは推定できるが、「8本の棒より3回抽出・・・」の方法は、あくまで「八卦」の抽出方法に似た方法であると思える。

(注1)ホツマツタエ文献には、8本の棒より抽出等の記載がない。

もしこの方法が「ひとつの推論」として許されるなら、次の方法も許されることになる。それは皆さんもご承知の「年末等のジャンボ宝くじ」の抽選方法に似た方法である。仮に回転している円盤が3個ある。その一つずつに1~8の

数字を割り振られたゾーンが描かれている。そして女性の抽選者の3名は合図を元に、矢が放った。矢が当たった数字は、「8」「1」「5」である。そして「モトアケ」を読むと「シハラ」になる。この「シハラ」は、「ホツマツタエ」文献の28-90~91文の「フトマニ」の占い結果になる。そしてこの証明方法でも「ホツマツタエ」当時の占いとして、許されることになるが、読者の感想はどうでしょうか。

それにしても、「日本古来の呪文」として、古代の日本に「トホカミエミタメ」という日本古来の呪文を唱えていたことである。この「トホカミエミタメ」の呪文は、「モトアケ」の読みと同じである。

インターネット(注2)の太占の説明

亀ト(きぼく)・鹿ト(ろくぼく)

太占(ふとまに)の中で最も有名なのが亀ト(きぼく)・鹿ト(ろくぼく)と呼ばれる占いで、一般の辞典などでは「太占」という言葉の説明として、誤ってこの亀トや鹿トの説明をしているものがあるほどです(「ケーキ」の項目にストロベリーショートケーキの説明をしたようなもの)。

しかし亀ト・鹿トは太占の中のひとつにすぎません。亀トは亀の甲羅を使用した占い、鹿トは鹿の肩胛骨を使用した占いで、現在でも日本の各地の神社で神事として行われています。亀トのことは中国の古代の書物「易経」にも書かれていますので、大陸ではかなり古くから行われていたようです。モンゴルでは羊の肩胛骨を使う方式も発達したようですが、日本では亀を使う方式と鹿を使う方式が二大流派として残りました。

日本に伝わるやり方では、亀の甲羅や鹿の肩胛骨の一部を割れやすくなるように薄く削り、そこにトホカミエミタメという日本古来の呪文に対応した傷を付けます。これを火に投じて、どこがひび割れたかで、神意(オラクル)を問うのです。

(注2)この情報は、「www2.tora-inc.com/aol/futomani/three_sacred_treasures.html-キャッシュ」より引用した。

フトマニの占い手順(マニアル)

現在「フトマニの占い手順」は解明されてないが、ホツマツタエ研究者の鋭意な努力により読者に発表できる日が近いと思っている。その日は「真摯」な研究者のみが知り得ると思いたい。

(おわり)